The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日中「二つの東北」を生きる中国人女性の移動をめぐる歴史実践ー戦争の痕跡を受け止めつつ震災を乗り越えようとする一人ひとりのライフストーリーー
Author(s)	王, 石諾
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/101590
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　王　石諾（WANG SHINUO）　）	
論文題名	日中「二つの東北」を生きる中国人女性の移動をめぐる歴史実践 ―戦争の痕跡を受け止めつつ震災を乗り越えようとする一人ひとりのライフストーリー―

論文内容の要旨

1980年代後半、日本では産業化と都市化により農村が周辺化し、日本人女性が伝統的な農村家族構造を敬遠する傾向が強まった結果、多くの農村男性が深刻な結婚難に直面した。これに対し、地方行政は「アジアからの花嫁」を迎える国際結婚を推進し、特に東北6県と新潟県では「ムラの国際結婚」が全国平均を上回る現象が確認された。その中で、1990年代以降、中国出身の女性が主要な結婚移住者となっていった。ただし、本稿はこうした結婚移住した中国人女性に焦点を当てるものの、当初から「国際結婚の女性」という枠組みや「満洲」移民など特定の歴史的出来事を前提とはせず、あくまでも3・11震災後に福島県に暮らす中国人の生活経験への6年前の調査から出発している。この間に支援活動を通じて知り合いになったのが、福島に日本人男性との結婚を機に移住してきた中国出身の女性たちであり、多くは1990年代後半から2000年代初頭にかけて日本で暮らし始めている。そして調査を進める中で気付いたのは、福島県在住の中国人女性には中国東北部出身者が圧倒的に多いという現実であり、これは日中「二つの東北」が歴史的に結びついてきた背景によるものである。

具体的な歴史的文脈として、戦時下に農山漁村である日本の東北地方から、現在中国東北部にあたる「満洲」へ農業移民として渡った人々が多く存在していたため、戦後には中国残留邦人を中心とする日中「二つの東北」間における人脈ネットワークとして残されている。一方、1978年の改革開放以降、「単位制」の衰退が中国全土で進行する中で、とりわけ「老工業基地」である中国東北部の転換が他地域よりも遅れ、1990年代後半に深刻な失業問題に直面した。多くの女性たちはこの局面を打開するため、民間の人脈ネットワークを頼りに日本東北への結婚移住を選択したのである。その後、移住して間もなく3・11震災により生活基盤が揺るがされたものの、彼女らは最終的に福島に留まり続けている。彼女たちは「満洲」時代を直接経験してはいないものの、移住先の福島に住む満洲経験者との出会いにより、改めて幼い頃から中国東北部で無意識に体感してきた「満洲」の痕跡が蘇ってくるのである。ただし、留意すべきは、女性の多くが当初「先進国としての日本」のイメージを抱いて移住してきた一方、「二つの東北」をめぐる歴史的構造については、移住後の日常生活の中で身体を通じて徐々に受け止め理解していったことが次第に分かってきた。従って、本稿では、中国東北部に生まれで、中国東北における「社会主義的近代化」の影響を受けながら、1990年代末頃に日本の東北地方の福島県に結婚移住してきた60年代70年代生まれの中国人女性の経験に注目した。そして移住後も長く住み続ける中で、この土地の歴史に由来する深い傷跡を受け止めながら、3・11震災を経験しつつ、なお留まり続ける生の営みを選択した理由について、彼女らの移動を介した生活経験から迫っていくものである。

本論文は全7章で構成され、序章に続き、第2～3章では関連する先行研究を整理した上で本研究の視座を明確にしつつ、適切な方法論の選択と理論的枠組みを提示した。具体的には、従来、中国東北部の土地柄は単に女性の移住ルートとなる「社会関係資本」としてのみ扱われ、移住前後を通じて織り込まれてきた女性一人ひとりの人生経験そのものが十分に検討されていない課題があった。また、女性たちの移動を介した人生を理解する土台として、以下の3点に基づいて既存研究を分析した。すなわち、1つに3・11震災をめぐる議論では移民女性像が「災害弱者」として単純化された問題が見えており、2つに女性たちの人生の原風景である「満洲」記憶に関する議論では、中国における「満洲」記憶が記録の「空白」の段階から現在の「語りづらい」段階へと移行している現状が示された。3つに中国東北部を生きてきた女性たちに注目する際、単位制と結びついた人生経験に対する検討が不足している。こうした課題を踏まえ、本研究では日中「二つの東北」の歴史的文脈を重視し、移住前後や結婚前後といった二分法的な枠組みに区分せず、彼女らの生活や経験の連続性を意識しつつ、彼女らの国境を越えた日々の営みに注目した。また、「満洲」記憶や「単位制社会」をめぐる女性の思いは、目に見えない形で彼女らが心の底で抱え続けていることであるため、本研究ではライフストーリー法（対話的構築主義）を用い、彼女らの「語り」に耳を傾け、時間をかけた継続的な対話を通じて、「二つの東北」を生きる彼女らの日常の細部に潜む「歴史実践」を描き出すことを試みた。

続く第4〜6章では、女性たちの移動を介した諸経験をめぐる研究内容と結果を示している。第4章では、3・11震災といった非常事態における女性たちの姿勢に焦点を当てた。まず、調査協力者である11名の女性の来歴を示しつつ、そこから一人ひとりの語りから、震災直後に彼女らが直面していた困難や避難選択を俯瞰した。その結果、震災直後の「帰った」・「残った」という両極端な外国人の避難選択が注目される元で、日中両国に引き裂かれる移住女性たちの葛藤が多く見過ごされていることが分かってきた。こうした生き方の裏で見え隠れする彼女らの複層的不安が、震災の非常時に増幅された一方で、それが地域でネットワークを立ち上げる原動力ともなったのである。それを踏まえ、現在もこうしたネットワークに頼りつつ生きる霞氏と芳氏（いずれも仮名）の来歴を考慮した震災経験を踏まえつつ、彼女らにとっての震災の意味を考察した。その結果、彼女らはこれまでの移住をめぐる人生経験を裏返すかのようにレジリエンスの種へと転換し、震災直後の地域を支え、「災害弱者」を越える姿勢が顕著に見えてきた。ここで留意すべきは、共に味わった震災経験が、彼女らを「よそ者」から地域社会に受け入れられる存在へと変え、そこで初めて、福島この土地との絆を深めながら、ここの人々と互いに理解し・支え合うようになったことが分かってきた。それゆえに、震災経験は、図らずも彼女らが日本の東北地方の重層的な歴史を知ろうとする情動的な起点となったといえる。さらに重要なのは、移住後に直面した言語の壁や社会的分断という課題を克服する過程において、女性たちが構造的な問題に対して柔軟かつ巧みに対応する自らの「行為主体性」を形成していった点である。この「行為主体性」は、彼女らの暮らしに通底し、彼女らの生きる知恵となっていた。他方、震災を乗り越え、地域ネットワークに大きく依拠しながらも、彼女らの心には依然として「揺らぎ」が残されていることが分かってきた。

続く第5章では、女性たちの「心の揺らぎ」の内実に迫っていく一環として、「満洲」時代を直接に経験していない彼女らの「満洲」をめぐる記憶に着目した。中国の「満洲」記憶の叙述における主導的なナショナルな記憶の存在、及び90年代以降の日中関係の緊張化という構造問題を踏まえ、霞氏と英氏（いずれも仮名）の「満洲」記憶に関するライフストーリーを通じて彼女らの歴史実践を見つめ、彼女らの「満洲」記憶の形成プロセスをめぐり、「種まきの幼少期」、「愛国主義教育を受ける学生時代」と「視野が広がっていく移住後の時期」との三段階に整理することができた。その中で、移動を通じて、彼女らが「満洲」をめぐって＜植民地支配―被支配＞の両端に置かれた日中双方の庶民からの視点をそれぞれ吸収していく中で、より立体的な「満洲」像を自ら模索し続けている姿が浮かび上がってきた。一方で、東北外部の出身者である筆者が女性たちとの対話を通じて次第に分かってきたことは、愛国主義教育が牽引する「（東北部の）外側からの視線」で構築された「満洲」記憶が強力かつ普遍的に語られる中で、彼女らは自身の記憶がその叙述構造から乖離していることを常に意識しているという点も明らかとなった。ただし、彼女らは真正面から抵抗するのではなく、日常の中で、地域の満洲経験者たちの「満洲」記憶に耳を傾けることで、個々人の具体的な接触の中に、常により広く重層的な「満洲」像を模索しつつ、自らの記憶を位置付けていくと工夫しているのである。この日常における小さな営みは、記憶の権力構造に対する彼女らの柔軟な抵抗であると考えられた。

さらに第6章では、先述の震災経験と「満洲」の傷跡を踏まえ、女性たちの人生そのものをより包括的に捉え、特に、彼女らが移住に至った背景として、中国東北部の80年代以降の「工業単位制社会」の弱体化という社会転換を視野に入れた。移住後、彼女らが先述した日本東北地方の歴史に由来する重層的な傷跡を受け止めながらも、なおそこに留まり続けるといった選択を理解していくために、春氏と松氏（いずれも仮名）という2名の女性のライフストーリーを描き出した。それらを通じて、彼女らが社会の激動や3・11後の復興に立ち向かいながら、如何にして生活を再構築しており、また中国東北での経験に応答しつつ日本東北の置かれている立場を刻々と気付いてきたのか、こうした日々の生活に潜む彼女らの歴史実践を描き出した。結果として、日中「二つの東北」の根底にある戦争の痕跡は、両地域を結ぶ人脈ネットワークだけでなく、世代を超えて連鎖した心の傷も残していることは分かってきた。また、「東京中心主義」の犠牲となる「東北」問題は、実は重層した形で女性たちの暮らしの隅々に見え隠れしていた。一方、これと類似する関係性が、中国社会の文脈においても「南方」と「我々東北」という象徴的な言葉があるように、単位制が弱体化しつつある社会転換の過程で見えてきた。このように、戦争の歴史において「植民地支配―被支配」の両端に置かれる「二つの東北」は、それぞれ異なる近代化の経路を歩んできたものの、実は類似した大きな進歩叙述が牽引する下で、再び共に「中央」との関係で対置される「周辺」の立場に追い込まれたことも見えてきた。強調すべきは、女性たちが異なる「二つの東北」の対立や断絶に着目するのではなく、時間と共に流れる共通する「東北」の痛みに目を向け、身をもって感じ取ろうとする姿が顕著に見えており、彼女らが「二つの東北」を繋ぐ「結び目」になりゆく可能性を考察した。以上を踏まえ、本研究で深く認識する「二つの東北」に秘める三重の意味を再確認した。

終章にあたる第7章では、本研究の一連の成果を通じて得られた知見をまとめた。その上で、今後の展望とし

て、女性たちの「歴史実践」と「対話」を重ねながら見つめてきたからこそ、調査者である筆者は調査を始めた当初からの「同じ中国人同士」という意識から、次第に自分自身がいわゆる「南方」の立場にある自らの「構え」を意識し、さらに少しずつ彼女らの意味世界に理解することができたことを振り返った。こうした「対話」が筆者自身にもたされた能動的な影響と未来への展望について触れつつ、まとめに代えた。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　WANG SHINUO　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教授	三好　恵真子
	副 査　准教授	小林　清治
	副 査　准教授	青野　正二
	副 査　教授	河森　正人

論文審査の結果の要旨

本論文は、旧満州の歴史的記憶を引き継ぐ中国東北部において、80 年代以降の「単位制社会」の弱体化に伴って結婚移民となり日本の東北地方に移動してきた中国人女性に目を向け、日中「二つの東北」の痛みに向き合いながら生き抜く女性の「歴史実践」について、彼女らの主観的意味世界に接近しつつ、対話的構築主義によるライフストーリー法により読み解いていく労作である。

申請者は、3・11震災における地域の外国人への関心を契機に、6年前より東北地方で調査を始めているが、そこで気づいたのは、この地域に長年に暮らしている中国人は、主として結婚移民の女性であり、中でも中国東北部出身者が圧倒的に多いという現実であった。すなわち、日中国交正常化により1980年代に中国残留日本人の帰国が始まり、彼らや呼び寄せられた家族を中心に日本人との人脈ネットワークが形成されることにより、かつての「満洲」の歴史現場である中国東北と日本を繋ぎ続けており、日中「二つの東北」は、それぞれの土地柄に基づき、国際結婚の構造の一端に位置付けられてきたのである。しかし、こうした女性たちの多くは、片言の日本語しか話せないまま結婚移住してきており、長い間日本で暮らす中でもいまだに簡易な日本語を駆使して暮らしている。そして女性たちに共通するのは、日本人の夫が家の長男であるケースが多く、移住後は義父母との同居と介護を担うことが一般的であり、またこうした女性たちの多くは、日本人の夫の苗字を冠した日本の名前を使って暮らしているため、地域の中国人同士であっても互いの本名を知らないことは珍しくない。他方で女性たちにとって、「先進国としての日本」のイメージを抱きながら意気揚々と日本に移住したものの、移住後の生活は、思い描いていた「幸せな人生」とは異なるものであった。彼女らは「満洲」時代を直接経験した世代ではないが、日本への移住経験を通じて、日常生活の中で移住先の東北地方に住む満洲経験者との出会いにより、改めて幼い頃から中国東北部で無意識に体感してきた「満洲」の痕跡が蘇ってくるのである。それゆえに彼女らが母国で学んできた「帝国主義的侵略―民族的抵抗」を軸に語られる国家記憶の構造的権力の存在を意識しつつも、複層的に見えてくる「満洲」像を日々の暮らしの中で自ら模索し続けていたのである。こうした彼女らの姿から徐々に理解されうるのは、女性たちにとって「満洲」が単なる過去の歴史に留まるものではなく、中国東北部の独特な土地柄と日本の東北部の移住経験を内面化しつつ、現在の暮らしの中で常に過去と関わりながら、「満洲」の記憶を主体的に築いていくことであり、まさに「歴史実銭」であった。

ただし、ここで見過ごしてはならないのは、中国東北出身者の女性が自発的に「インフォーマルな形」で集まりながら支え合い、主体的にネットワークを構築していることである。3・11震災直後の混乱下にて多くの外国人が帰国する中で、家族のために福島に留まり続けなければならなかったことも少なくなかったが、言語の壁がある上に、被ばくや子供の安全への不安が高まる中で、彼女らは中国人同士の人間関係により自発的に集まりながら相互扶助のネットワークを形成していったのである。こうして震災を契機に形成され地域に点在する女性ネットワークは、それ以来、女性がリードする地域団体として発展したものもあるが、こうした集まりの場において、彼女らは生活の悩みや喜びを共有しながら相互に支え合う姿があった。ただしその背後には、かつての「満洲」からもたらされた傷跡と重ね合わせるかのように、移住後に待ち受ける彼女らが一人では抱えきれない様々な辛さがあることも見えてきたという。それにもかかわらず、彼女らが日本の東北であるこの地に根を張って暮らしを営み続けているのは一体なぜなのであろうか。この根源的問いを掲げつつ、申請者は根気強く調査を遂行している。

加えて、本研究では、戦争の痕跡を受け止めつつ災害を乗り越えるために、日中「二つの東北」の痛みに向き合いながら生を営むという選択をする中国人女性たちについて理解していくために、「記憶」という目には見えにくい「満

州」の歴史的文脈を念頭に置きつつ、さらにより彼女らの来歴や人生経験そのものに注視していくために、移動の端緒となる、かつての「満洲」が残した工業遺産を基に発展してきた中国東北の「工業単位制社会」の弱体化も重要な手掛かりとしている。こうした国境を越えて展開される女性たちの日々の営みが、「単位制」の弱体化や戦争の痕跡を受け止めつつも、日中の尊い結び目となりゆく歴史実践であることが次第に分かってきたのである。

一方、本調査を進めていく上で、極めて重要になると考えられるのが、女性たちの移動を介した経験というものは、客観的に我々が捉えられるというよりも、むしろ彼女らの「語り難さ」の中にあるという側面に目を向けていることである。母語の中国語を用いたにもかかわらず、女性たちの話の端々に躊躇や沈黙、微かな抵抗感が見え隠れしており、こうした対話の不調和をそのまま見過ごしてしまうと、語りの表層的な理解に留まってしまうために、申請者は、経験の語りの奥にある目に見えないものも含めた主観的な意味世界について、時間を掛けて対話し理解していくことを繰り返している。その結果、そうした「語り難さ」が、彼女らが生きる「東北」という社会に潜む複数の権力構造と深く結びついていることも発見し得たと言えよう。

本稿の締めくくりとして、「二つの東北」の複数の意味を再確認しつつ、結論へと繋げている。一つは、本論文の中で一貫した姿勢を見せることにより、結婚移民として日本の東北の暮らしで感じたことが、かつて中国東北での暮らしを思い起こさせ、双方の東北での経験を自ら応答しつつ理解しようとする女性たちの姿を表現することができたとしている。それを踏まえつつ、二つ目として、さらに、「南方」と「東京」という対極にある「周辺」としての二つの「東北」が共有する痛みの意味が見えてきたことである。ただし彼女らにとってそれは容易なことではなく、3・11震災を契機に立ち上げられた女性ネットワークが示すように、共に味わった悲痛な震災経験が、彼女らを「よそ者」から地域社会に受け入れられる存在へと変え、そこから初めて、地域との絆を深めながら、互いに知り・理解し・支え合うようになったのではないかと推察している。この意味において、震災経験は、図らずも彼女らが日本東北地方の重層的な歴史を知ろうとする情動的な起点ともなり得たと捉えている。そして上記でも触れたように本論文では、満洲移民など特定の歴史的出来事に焦点を当てるのではなく、あくまでも3.11災害を経験した中国人女性たちへの暮らしの調査から出発している。ただし、加害/被害の視点に立たないからこそ、調査を続けていく中で、国際結婚を機に日本の東北の地に来たものの、過去から現在に引き続く傷跡を重ね併せながら、さらに災害をも経験した女性たちの営みに重要なもう一つの意味が見えてきたと考えられる。すなわち、「二つの東北」の三つ目の意味は、彼女らが日々の生活の中で受け止めてきた双方の「東北」の痛みというものが、国境を越えて移動する一人ひとりの生活者として、東アジアの歴史の連続性を実感させるものであり、それゆえに国境を越えた生活の「豊かさ」とは何かを模索しながら展開される日々の営みが、尊い「結び目」となり得る可能性を示唆することに成功している。まさにこれまで見過ごされてきた「二つの東北」における戦後の陰に接近しつつも、災害を乗り越えていく中国人女性たちの行為主体性から描き出すことにより、アジア地域史における新たな発見へと結実したと言えるのではないだろうか。

以上を踏まえつつ、本論文の学術的・国際的重要性をより俯瞰的視座から強調しておきたい。冷戦体制終結後の1990年代以降の日本では、敗戦を起点とする民主主義や平和、経済的繁栄に支えられてきた「長い戦後」意識が次第に相対化されていく中で、東アジアの近隣諸国との間でのアジア太平洋戦争の歴史認識をめぐる和解への取り組みが徐々に進んできた。しかし、2000年代の東アジアの共同歴史研究の過程で「正義」をめぐる、それぞれの国の間の隔たりが顕在化し、相互の歴史和解を依然として困難なものとしている。それゆえに、東アジアにおける歴史和解を進める上でとりわけ重要となる「謝罪」、「共同歴史研究」、「戦後補償訴訟」、それに加え、アジア地域の交流に共通する土台を探す必要性が、国際的にもいままさに提起されている。本論文が示す「結び目」となりゆく女性たちの尊い実践は、国家による加害や被害の歴史に回収しえない、戦中・戦後の一人ひとりの思想的営為の実相を明らかにし、人びとの生活の次元に即した東アジアの歴史和解と連帯に向けた基盤構築への道を切り拓くものであることは間違いない。

以上、論文審査の結果、本論文は、博士（人間科学）の学位を授与するにふさわしいものと判定した。